

絵本を学ぶ、その序章から－絵本とは何か

石井 光恵

今回の概論としての講座では、近年絵本がどのような認識で捉えられるようになって来ているかについて、日本の絵本の進展を中心に解説します。戦後（一部戦中を含みますが）70 年の足跡を、「絵本はメッセージ」「絵本は商品」「絵本はアート」「絵本はメディア」の時代として、4 区分に括ってみました。4 区分にはそれぞれその時代背景として、＜社会の動き＞を加えています。各区分にあげた絵本は、ほんの一部ですが、代表的な例としてあげています。

1 「絵本はメッセージ」の時代

まず、戦中・戦後復興期（1930 年代～1950、1960 年代初期）に出現した絵本について考えます。戦中（満州事変～1945 年 8 月 15 日終戦）と戦後復興期（1945 年～1960 年）として括っています。

この時代は、絵雑誌という日本独特のスタイルから、近代的な絵本の誕生を模索した時代です。諸外国の「絵本」に学び、日本の絵本誕生に向けて歩み出す先達の努力が、今日の絵本の礎を築いたことがわかります。さまざまに、人々が絵本に思いを込めた時代で、絵本作りをする大人にも、子どもに絵本を手渡す大人にも、絵本を読む子どもたちにも熱いメッセージが語られます。

<社会の動き>

1923 年 関東大震災／1929 年 世界恐慌／1931 年 満州事変／1937 年 支那事変、日中戦争の開幕／1938 年 内務省警保局図書課「児童読物改善ニ関スル指示要綱」⇒内務省による検閲、言論・思想統制へ／1941 年 真珠湾攻撃、「大東亜戦争」へ／1945 年 終戦、連合軍の進駐と占領／1950 年 朝鮮戦争勃発／1952 年サンフランシスコ講和条約発効（批准 1951 年）で占領終結／1953 年 テレビ放送開始／1960 年 池田内閣「所得倍增計画」を閣議決定／1962 年 東京でスモッグ深刻化／1964 年東京オリンピックの開催、東京－新大阪を 4 時間で結ぶ東海道新幹線開業／1966 年 ビートルズ来日／1967 年 テレビ受信契約数 2,000 万件を突破／1968 年 シンナー遊び激増／1968-1969 年大学紛争ピーク、東大安田講堂の占拠

<戦中の絵本>

- ・1922 年～1944 年 コドモノクニ（大正～昭和にかけての絵雑誌）
- ・1936 年～1944 年 <講談社の絵本>シリーズ創刊号『乃木大将』（池田宣政 文、伊藤幾久造 絵）

<戦後復興期の絵本>

- ・戦後・昭和 20 年代 仙花紙絵本からの出発
- ・ショッキングな海外からの絵本たち

⇒戦後、GHQ によって日本にもたらされた絵本たち

子どもにとってのリアリティや子どもにとっての面白さが追求された絵本たち
海外との自由な接触も可能となり、海外の絵本から、積極的に学ぼうという姿勢

- 1953 年 <岩波の子どもの本>シリーズ
『ちいさいおうち』(バージニア・リー・バートン 作、石井桃子 訳、岩波書店、1954)
(*The Little House*, 1942)
- 1956 年 福音館書店の<こどものとも>シリーズ
- 1961 年 福音館書店の<世界傑作絵本>シリーズ
『100 まんびきのねこ』(ワンダー・ガアグ 作、石井桃子訳、福音館書店)
(*Millions of Cats*, 1928)
『シナの五にんきょうだい』(クレール・H.ビショップ 文、クルト・ビーゼ 絵、石井桃子訳)
(*The Five Chinese Brothers*, 1938)

<1960 年代の絵本>

- 大学紛争などから管理体制社会の批判が増大、管理社会へのアンチテーゼとして
1967 年 『八郎』(斎藤隆介 文、滝平二郎 絵、福音館書店) (創作民話)
- 日本の絵本を大きく飛躍させていく⇒絵本芸術を生み出していくという心意気に溢れる出版界
至光社の絵本 1967 年『どんくまさん』(富蔵千鶴子 文、柿本幸造 絵)
こぐま社の絵本 佐藤英和が集団(作家と画家と編集者が一緒に)で絵本作りをする。
1967 年 『11 ぴきのねこ』(馬場のぼる 作)
1969 年 『わたしのワンピース』(にしまさかやこ 作)
童心社の絵本
1967 年 『いない いない ばあ』(松谷みよこ 文、瀬川康男 絵)
福音館書店の絵本
1964 年 『ちいさなうさこちゃん』(ディック・ブルーナ 作、石井桃子 訳)
(*Nijntje*, 1955, 1963)
1969 年 『いやだいやだ』(せなけいこ 作)の絵本シリーズ
1966 年 『しょうぼうじどうしゃじふた』(渡辺茂男 文、山本忠敬 絵)
1966 年 『ぐるんぱのようちえん』(西内ミナミ 文、堀内誠一 絵)
1967 年 『ぐりとぐら』(なかがわりえこ 文、おおむらゆりこ 絵)
1967 年 『スーホの白い馬』(大塚勇三 再話、赤羽末吉 絵)
ポプラ社の絵本
1967 年 『やまんばのにしき』(松谷みよ子 文、瀬川康男 絵)
1967 年 『ちからたろう』(今江祥智 文、田島征三 絵)
完成度の高い 民話絵本

海外の翻訳絵本：(日本での出版年)

- 1961 年 『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』(バージニア・リー・バートン 作、
村岡はなこ 訳、福音館書店) (*Choo Choo*, 1937)
- 1963 年 『もりのなか』(マリー・ホール・エッツ 作、間崎ルリ子 訳、福音館書店)
(*In the Forest*, 1943)
- 1965 年 『ちいさいおうち』(バージニア・リー・バートン 作、石井桃子 訳、岩波書店)
(*The Little House*, 1942) 1954 年版とは判型が異なる
- 1965 年 『三びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウン 作、瀬田貞二 訳、
福音館書店) (*The Three Billy Goats Gruff*, 1957)
- 1965 年 『てぶくろ』(エウゲーニー・M・ラチョフ 絵、内田莉莎子 訳、福音館書店)
(*Р у к а в и ч к а*, 1950)
- 1967 年 『あおくとときいろちゃん』(レオ＝レオーニ 作、藤田圭雄 訳、至光社)
(*Little blue and little yellow*, 1959)

2 「絵本は商品」の時代

ここでは、高度経済成長期(国民が日本の繁栄を次第に実感するようになっていく時期)を迎えた日本の絵本についてまとめてみました。1970 年～1980 年代の絵本たちです。百花繚乱に日本の絵本作家が出現してくる時代でもあります。1970 年代頃より絵本ブーム(その後何回かこの名称で呼ばれる時代がありますが、その最初のブーム)と呼ばれるほど、絵本の動きが活発化し、絵本の表現の多様性について、作家も読者も様々に気付いていった時代です。経済的な余裕を背景に、実験的な絵本も続出しました。自己表現としての絵本の存在にも気付くこととなります。表現の多様性同様にテーマも、多様化した時代でした。

<社会の動き>

1970 年 大阪で日本万国博覧会開催、カドミウムなどによる土壌汚染など公害が全国に／1971-1974 年 第 2 次ベビーブーム／1976 年 ロッキード事件、天安門事件(第一次)／1979 年 国際児童年(子どもに注目が集まる)／1980 年 校内・家庭内暴力事件増加、金属バット殺人事件／旧ソビエト連邦にゴルバチョフ登場 ⇒ 米ソの関係が急速に緊張緩和／1983 年 NHK の朝ドラ「おしん」が空前のブーム／1985 年 小・中学校で「いじめ」増加／1986 年 都心の地価高騰／1987 年 旧国鉄分割民営化／1987 年 ブラックマンデー、1989 年以降バブル経済の破綻へ／1989 年 昭和天皇の崩御(昭和の終焉)、ベルリンの壁崩壊

<1970 年代の絵本>

- ・1970 年代は、60 年代の発展を土台に大きく花開く絵本ブーム
- 1970～1977 年 <こぐまちゃんえほん>シリーズ こぐま社
- 1973 年 『ふきまんぶく』(田島征三 作、偕成社)

- 1974 年 『おいしいのぼうけん』(古田足日 文、田畑精一 絵、童心社)
- 1974 年 『ねずみくんのチョッキ』(中江嘉男 文、上野紀子 絵、ポプラ社)
- 1976 年 『はせがわくんきらいや』(長谷川集平 作、すばる書房)
- 1977 年 『はじめてのおつかい』(松野正子 文、林明子 絵、福音館書店)
- 1977 年 『もこもこもこ』(谷川俊太郎 文、元永定正 絵、文研出版)
- 1977 年 『100 万回生きたねこ』(佐野洋子 作、講談社)
- 1977 年 『旅の絵本』(安野光雅 作、福音館書店)

海外の翻訳絵本：(日本での出版年)

- 1972 年 『おばけのバーバパパ』(アネット・チゾンとタラス・テイラー 作、
やましたはるお 訳、偕成社) (*Barbapapa*, 1970)
- 1975 年 『かいじゅうたちのいるところ』(モーリス・センダック 作、じんぐうてるお 訳、
富山房) (*Where the Wild Things Are*, 1963)
- 1976 年 『はらぺこあおむし』(エリック・カール 作、森比左志 訳、偕成社)
(*The Very Hungry Caterpillar*, 1969)
- 1976 年 『あかいふうせん』(イエラ・マリ 作、ほるぷ出版) (*Il palloncino rosso*, 1967)
- 1978 年 『ゆきだるま』(レイモンド・ブリッグズ 作、評論社) (*The Snowman*, 1978)

<1980 年代の絵本>

- ・日本の絵本の国際的な評価
国際アンデルセン賞画家賞の受賞 ⇒1980 年 赤羽末吉、1984 年 安野光雅
- ・1980 年代の主な絵本
 - 1980 年 『キャベツくん』(長新太 作、文研出版)
 - 1980 年 『絵本玉虫厨子の物語』(平塚武二 文、太田大八 絵、童心社)
 - 1983 年 『とうさんまいご』『まどから・おくりもの』(五味太郎 作、偕成社)
仕掛け絵本
 - 1988 年 『とべバッタ』(田島征三 作、偕成社)
 - 1988 年 <コッコさん>シリーズ『おやすみなさいコッコさん』
(片山健 作、福音館書店、こどものとも)
 - 1987 年 <ばばあちゃんのおはなし>シリーズ『いそがしいよる』
(さとうわきこ 作、福音館書店、こどものとも傑作集)
 - 1983 年 <14 ひきのねずみ>シリーズ 『14 ひきのひっこし』(いわむらかずお 作、童心社)
- ・自然を描いた絵本の充実→ 甲斐信枝、薮内正幸、柳生弦一郎の活躍
- ・写真絵本の出版 相次ぐ→ 姉崎一馬、宮崎学、英伸三、今森光彦の活躍
『はるにれ』『ふくろう』『みず』『今森光彦昆虫記』
- ・戦争や公害、障害についてなど、社会問題の絵本化

- 1978 年 『まちんと』『ぼうさまになったからす』（松谷みよ子 文、司修 絵、偕成社）
1980 年 『ひろしまのピカ』（丸木俊 作、小峰書店）
1982 年 『みなまた海のこえ』（石牟礼道子 文、丸木俊・位里 絵、小峰書店）
1980 年 『わたしいややねん』（吉村敬子 文、松下香住 絵、偕成社）
1985 年 『さっちゃんのまほうのて』（先天性四肢障害児父母の会 文、田畑精一 絵、偕成社）
- ・宮沢賢治童話絵本の刊行
クレヨンハウス（松田素子編集）のシリーズ、小林敏也、いせひでこ、etc.
絵本の絵によって、宮沢賢治童話にイメージの広がりや情景の理解をもたらす

海外の翻訳絵本：（日本での出版年）

- 1984 年 『ジュマンジ』（クリス・ヴァン・オールスバーグ 作、へんみまさなお 訳、ほるぷ出版）（*Jumanji*, 1981）
1985 年 『すきですゴリラ』（アントニー・ブラウン 作、山下明生 訳、あかね書房）（*Gorilla*, 1983）
1985 年 『おじいちゃん』（ジョン・バーニンガム 作、谷川俊太郎 訳、ほるぷ出版）（*Granpa*, 1984）
1986 年 『わすれられないおくりもの』（スーザン・バーレイ 作、小川仁央 訳、評論社）（*Badger's Parting Gifts*, 1984）
1987 年 『ルピナスさん』（バーバラ・クーニー 作、掛川恭子 訳、ほるぷ出版）（*Miss Rumphius*, 1982）

3 「絵本はアート」の時代

日本が、バブル経済に沸き、その崩壊するまでの時代（1980年代後半～1990年代）を賑わした絵本群をまとめています。高揚感がありながら実態のないバブル経済の中、世の中の危うい動きに対して絵本に実感（手ごたえ）や身体性を求めた時代の絵本といえます。また、人々の価値観にも揺らぎが見られ、高度経済成長期のようながむしやんな生き方に対するように、価値観の多様化する時代ともなりました。その一つには、生きる力を探しながら、スローライフ的な生き方（いいじゃんライフ）に共感していくという傾向も生まれました。また、自分探しやアイデンティティの探求なども絵本で、という作家たちも出てきました。このように価値観が多様化していく中、『絵本はアート』（中川素子著、教育出版センター、1991年）が出版され、絵本の視覚表現への視点の重要性が提唱され、従来の文学、教育的な絵本観から、美術的な視点での絵本観に大きく絵本観が変わることになります。ある種パラダイムの転換とも言える提言で、その後こういった分野（視覚表現を専門とする美術の分野）からの発言が多くなってきます。日本の絵本が、世界的評価を得るようになるのもこのころからです。

<社会の動き>

1990 年 バブル経済の崩壊／1991 年 地価下落始まる、旧ソビエト連邦消滅／1995 年 阪神淡路大震災／1996 年 携帯電話、インターネット急速に普及

<1990 年代の絵本>

- ・ ゆったり、ゆったりとした絵本たちの登場
 - 1990 年 『エンソくんきしゃにのる』（スズキコージ 作、福音館書店、傑作集 ←1986 年こどものとも）
 - 1990 年 『ルラルさんのにわ』（いとうひろし 作、ほるぷ出版）
 - 1992 年 『バスにのって』（荒井良二 作、偕成社）
 - 1998 年 『ゴムあたまポンたろう』（長新太 作、童心社）
 - 1999 年 『がたごとがたごと』（内田麟太郎 文、西村繁男 絵、童心社）
- ・ <イメージの森>シリーズの刊行（1991 年～1996 年 15 冊 ほるぷ出版）
 - 1991 年 『サルビルサ』（スズキコージ 作）
 - 1991 年 『ハのハの小天狗』（飯野和好 作）
 - 1991 年 『海の夏』（伊藤秀男 作）
- ・ 読者との共同作業（コミュニケーション）を求める絵本
 - 1990 年 『らくがき絵本 五味太郎 50%』（五味太郎 作、ブロンズ新社）
 - 1990 年 <LITTLE EYES (リトルアイ)>シリーズ（駒形克己 作、偕成社）
- ・ 赤ちゃん絵本の増加

海外の翻訳絵本：（日本での出版年）

- 1991 年 『ふしぎなかず』（クヴィエタ・パツォウスカー 作、ほるぷ出版編集部 訳、ほるぷ出版）（*Eins, fünf, viele*, 1990）
- 1992 年 『かようびのよる』（デヴィッド・ウィーズナー 作、当麻ゆか 訳、福武書店）（*Tuesday*, 1991）
- 1992 年 『夢を追いかけるークリストファー・コロンブスの物語』（ピーター・シス 作、吉田悟郎 訳、ほるぷ出版）（*Follow the dream*, 1991）
- 1996 年 『ぼくはおこった』（ハーウィン・オラム 文、きたむらさとし 絵・訳、評論社）（*Angry Arthur*, 1982）

4 「絵本はメディア」の時代

2000 年代以降、急速な情報機器（パソコン、携帯電話、タブレット、スマホなど）の発達と普及が起っています。この括りでは、その状況を背景とした時代に出現している絵本について述べています。この SNS 隆盛時代では、広く誰かと繋がっていようとする意識とグローバルな意識が顕在化してきています。そのような社会では、情報の共有化が重視されることはもちろんのこと、誰もが情報の発信源となれる状況を生み出しています。こうしたコミュニケーションツ

ールの質の変化は、絵本と読者の関係性にも影響を及ぼしています。絵本でも、従来のように絵本として完成しているものを、読者が読ませてもらおうというのではなく、読者も絵本に関わって絵本が完成する、というスタイルが好まれるようになりました。絵本の作者も読者も、そうした双方向性で絵本を考えるようになってきています。その表れのひとつとして、インタラクティブな絵本作りが出てきました。読者も絵本に関われる存在であるという意識が強くなっているということです。従来とは違った意味で、仕掛けの絵本が続出しています。また、関係性の変化ということから、絵本作家による子どもたちとのワークショップも盛んに行われ、そういったことから絵本作りは変化しています。テロ、戦争、原発、震災などの自然現象による災害などで、理不尽に命が奪われるという不安な感覚がぬぐえないこともあり、そういったこともこれからの絵本のテーマに反映してくることでしょう。

< 社会の動き >

2000 年 三宅島の雄山噴火／2001 年 米国で同時多発テロ、アフガニスタン空爆／2003 年イラク戦争／2004 年 スマトラ沖地震／2008 年 iPhone 日本発売、リーマンショック／2011 年 東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故／2013 年 特定秘密の保護に関する法律の成立／2014 年 御嶽山噴火／2015 年 安全保障関連法の成立／2016 年 熊本地震

< 近年出版されている絵本 >

- ・絵本と読者の双方向性（インタラクティブ性）への着目
絵本で読者に仕掛けていくことから、いわゆる仕掛け絵本的なものが増えている
2008 年 『100 かいだてのいえ』（いわいとしお 作、偕成社）
2013 年 『りんごかもしれない』（ヨシタケシンスケ 作、ブロンズ新社）
- ・読者のイマジネーションと身体性へ働きかける試み
2012 年 『ほしのはなし』（北野武 作・絵、ポプラ社） 映像的な感覚
2012 年 『きこえる？』（はいじまのぶひこ 作、福音館書店）
ブラティスラヴァ世界絵本原画展 金のりんご賞受賞 世界的な評価
2013 年 『ぎょうれつ』（中垣ゆたか 作、偕成社）
2014 年 『きょうのおやつは』（わたなべちなつ 作、福音館書店）かがみのえほん
- ・世界的評価を受ける新人絵本作家たち ⇒きくちちき、はいじまのぶひこ、ミロコマチコ

海外の翻訳絵本：（日本での出版年）

- 2007 年 『オオカミ』（エミリー・グラヴェット 作、ゆづきかやこ 訳、小峰書店）
（*Wolves*, 2005）
- 2009 年 『なみ』（スージー・リー 作、講談社）（*Wave*, 2008）
- 2009 年 『ラストリゾート』（J. パトリック・ルイス 文、ロベルト・インノチェンティ 絵、青山南 訳、BL 出版）（*The last resort*, 2002）

- 2010 年 『まるまるまるのほん』(エルヴェ・テュレ 作、谷川俊太郎 訳、ポプラ社)
(*Un livre!*, 2010)
- 2012 年 『オニオンの大脱出』(サラ・ファネリ 作、みごなごみ 訳、ファイドン)
(*The Onion's Great Escape*, 2011)
- 2013 年 『雪がふっている』(レミー・シャーリップ 作、青木恵都訳、タムラ堂)
(*IT LOOKS LIKE SNOW*, 1962) 絵のない絵本
- 2016 年 『メガロポリス 空から宇宙人がやってきた!』(クレア・デュドネ 作、
ドリアン助川 訳、NHK 出版) (*La Mégalopole*, 2015)
フランスから来た絵本。全体を開くと、3.7m になる、迷惑な絵本

<ひとつの結論として>

幼い子どもの頃に出会うものと考えられている絵本も、時代の思潮とともに人間の幸福の地平を目指して、ゆっくりながら変遷を繰り返してきたし、これからも繰り返していくものだと思います。その陰には、絵本を愛してやまない幾多の人々の不断の思いと情熱がありました。時代を読み、先駆ける面白さも、何ら大人の文学や芸術と変わりません。子どもだましの通用しない世界なのです。

最後に、深長でコンビニエントな「絵本とは...」を紹介します。『アメリカン・ピクチュア・ブックス』(*American Picturebooks from Noah's Ark to The Beast Within*, 1976) のバーバラ・ベーダー (Barbara Bader) の定義で、「ピクチュアブック (絵本) は、テキストとイラストレーションがトータルにデザインされたものであり、マニュファクチュアの産物、すなわち、生産品であり、コマーシャル・プロダクト、すなわち、商品であり、また社会的、文化的、歴史的ドキュメント (記録) であるが、なによりも第一に、子どもにとって一つの経験となるものである。芸術の形態としては、絵本は、絵とことばの相互依存、向かい合う二つのページの同時提示、ページめくりのドラマをかなめとしている。そして、絵本は、それ自体として、無限の可能性をもつ。」(『絵本・物語るイラストレーション』吉田新一著、日本エディタースクール出版部、1999 年) というものです。これは 1976 年時点での定義ですので、2000 年代の現代としては、これに「絵本はアートであり、絵本はメディアである」といった要素を加えたいと思います。

ここには、今後の絵本研究に活かせる、面白い視点が財宝の山のように埋め込まれています。